

事例に学ぶ自治体防災

関東大地震とパニック神話

パニック呼ぶ「念のため避難」

山梨大学地域防災・マネジメント研究センター長 鈴木 猛康



1923年9月1日相模湾の海底（相模トラフ）で発生したM7.9の大地震は、10万5000人というわが国最大の犠牲者を出した関東大震災を発生させました。9月1日は防災の日、ほとんどの自治体がその前後に総合防災訓練を開催するため、関東大震災をご存じない方はいないでしょう。

1923年関東大震災の被害の特徴は、激しい揺れとともに、その後に発生した火災でした。本稿では、火災旋風の発生によって修羅場となった本所被服廠跡地での惨状を紹介しながら、災害時のパニックという現象について学びたいと思います。

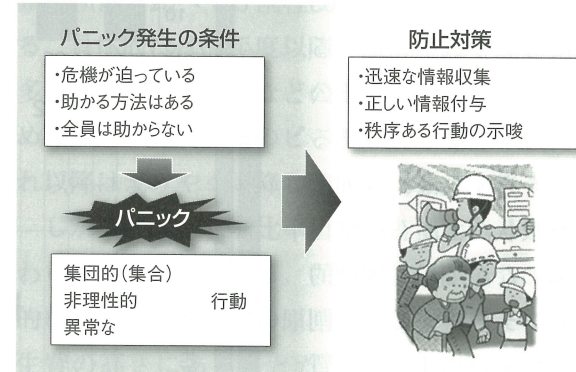
原典はギリシャ神話の半獣神

パニックは、突発的な不安や恐怖によって動揺し、正常な判断ができない個人の心理状態を示す言葉として使われています。しかし、本来は軽々しく使う言葉ではありません。そもそもパニックは、ギリシャ神話に出てくる半獣神パンに由来しています。パンは大好きな昼寝を邪魔されると、怒り狂って人、動物構わず言い知れぬ恐怖を与えたのだそうです。人々は恐怖にかられて、親は子を、子は親を忘れ、理性や判断力をかなぐり捨てて逃げ惑いました。この非理性的で異常な集団的な逃走行動をパニックと呼ぶようになったと、東京女子大学名誉教授の広瀬弘忠氏は紹介しています。

災害心理学では「パニック神話」という言葉があります。この言葉は、災害時にはパニックが必ず起こるといえるのは「神話」であって、災害時にパニックはめったに起こるものではない、という

意味で使います。

図 パニックの特徴と対策



「一部しか助からない」が明らかな時発生

映画館で映画を鑑賞中に、地震が発生したとしましょう。停電で真っ暗になり、非常誘導灯が点灯している状況です。映画館の係員が出口からの避難を促すと、観客は出口へ向かいますが、目の前にいる幼児や高齢者を押しのけて、われ先に出口へ観客が殺到することはありません。ほとんどの観客は、援護を必要とする人に手を貸し、順番を譲る等の理性的な行動をとります。しかし、既に地震で発生した火災が館内に延焼し、煙が館内に猛烈な勢いで拡がっており、出口は小さく、館内にいる観客の全員が避難できないことが誰の目にも明らかな場合はどうでしょうか。誰かが列の前にいる高齢者を押し倒し、出口へ急ぎ始めたとき、それに同調した理性を失った他の観客も、互いに争って出口に向かって走り出し、倒れた子供や高齢者を容赦なく踏みつけ、出口付近に観客が

殺到して大混乱が発生します。その結果、出口では身動きがとれなくなり、多くの観客が火災の犠牲となります。

このように、確実に助かる方法があるにもかかわらず、助かるのは全員ではなく一部に限定されることが明らかな特殊な条件下で発生する、集団的かつ非理性的な行動のことをパニックと呼びます。パニック神話を信じてしまい、延焼が映画館まで迫っているにもかかわらず、パニックが起こることを恐れて、「消防隊の消化が順調に行われており、ここまで延焼することはありませんが、念のため避難してください」というような誤った観客の誘導をしてしまうと、前述のような本当のパニックが発生します。

火災旋風と同時に発生したパニック

関東大震災では、地震発生が11時48分とお昼の準備時と重なったため、かまどや七輪におこっていた火の上に倒壊した住宅の壁や柱、家具がのしかかり、学校、病院、研究所等の薬品類が棚から落下し、至る所で火災が発生しました。東京市の全焼家屋は30万棟を超え、市内全棟48万棟の7割近くが全焼してしまいました。

その中でも最大の惨事とされているのが本所区横網町（現墨田区横網）にあった本所被服廠跡地での火災でした。この場所は現在の横網町公園で、陸軍省が軍服工場の跡地を、通信省と東京市に払い下げた2万坪（6万6000m²）程度の土地で、運動公園や小学校等が建設される予定でした。火災の延焼を恐れ、家財道具を荷車に積んで避難した下町の住民たちは、この広い跡地に次々に集まり、家具で囲ったスペースにゴザ等を敷いて身を休めたり、遅い昼食をとったりして、家屋倒壊による圧死と火災から逃れることのできた安堵感を覚えていました。2万坪とは言え、約4万人が家財道具とともに避難してきたため、三角形の被服廠跡地は身動きができない状態になっていました。

そこに、両国駅の方からゴーという不気味な音とともに黒い煙が敷地に襲来し、人や家財道具、大八車までが旋風に巻き上げられることとなりま

した。荷物は次々に燃え始め、巻き上げられた人がばたばたと落ち、積み重なりました。火災旋風の襲来です。

火災旋風は、個々に発生した火災が大量の空気（酸素）を消費し、火災の発生していない周囲の空気を取り込むことによって、局地的に上昇気流を発生させる現象とされていますが、実はその実態がよくわかっていません。燃烧している中心部分から1000度に達するような高温の空気が上層へ吐き出され、それが炎をともなった旋風になるとされています。



本所被服廠跡地での惨状（Robert L. Capp提供）

被服廠跡地では、火災旋風の移動に伴って、数千人の避難者が逃げ惑い、旋風に巻き上げられ、黒こげになって落下して積み重なる、という光景がしばらく展開されました。逃げ惑う避難者たちは、死体や倒れた人を踏みつけながら、群衆の逃げる方向へと我先に逃げることとなりました。倒れた子供を捨てて避難した親の逸話も残されています。災害時に発生するパニックとは、このようなものです。この跡地で犠牲となった避難者の数は3万8000人と言われているので、1.9人／坪（3.3m²）という想像を絶する惨状だったことがわかります（写真参照）。当時とは異なって今では豊富な情報伝達手段があります。したがって自治体がパニックという現象を正しく理解し、迅速に情報収集を行い、住民に対して今何が起こっており、それがどのように進展するかという正しい情報とともに、秩序ある具体的な行動を促すことにより、パニック発生を事前に予防することができるのです。

G